

が近くの飯屋で鰯の煮付けを食い非常に美味だったので、代金として医療器械を置いていき、それがそもそもしや医科器械店誕生の起源になったという。また、先祖が徳川家康の江戸入府の途中、どこかの海上で船中に鰯がとびこんできたことを吉端として名付けたというなどの諸説がある。

〔質問〕 岡田 治 夫（津島総研）

商人の商ない方法として、いろいろ変遷しておりますが、カタログ商法・価値表示方法は医科器械舗には特有のものがあつたか否か。

御発表の中にいろいろの医療器械舗が出てきましたが、その店舗特別のものが有つたか。それと、その店舗から出すカタログには、特別の意味をあらわしていたか否か。

〔解答〕 谷 津 三 雄（日大松戸歯）

1. 江戸時代一枚刷によるものは阿蘭陀流とか諸流との記載のあることと、製作者がそのまま販売を兼ねていたものと、製作者と販売者が別であるなどがあつて、それぞれの特徴があつたと思われる。しかし、一般には薬店、書籍店と併用されていたので、これらも含めて特徴ある宣伝をしたのであろう。また、秘伝として公にしなかつたものもあつたと思われる。

2. 明治10年代は主として外国の訳本のためおそらくわが国特有のものはなかつたと思われる。例えば、明治11年刊と明治14年刊の異なる機械店のカタログを比較しても同じであることから推論できる。しかし、東大や日赤、あるいは順天堂の指導によると称しているカタログには特徴がみられる。

3. 半田屋の鍼、また、日清、日露戦争の影響によるカタログもあるし、後藤風雲堂は顕微鏡からレントゲンに移行するという特徴がみられる。

〔質問〕 榊原 悠紀田郎（愛知学院大学）

明治22年発行の“学校用医療器材”のカタログがあつたようですが、これは現在の身体検査のはじめの活力検査が導入されたのが、明治21年であつたことを考えると、それとの関連について何かお気づきのことがありましたら教えて下さい。

〔解答〕 谷 津 三 雄（日大松戸歯）

今日でいう定期健診用の器具もかなり掲載されていったような気がしますので、よく調べてお知らせいたします。

オランダ医学に見られる歯科的事項

日本大学松戸歯学部

谷 津 三 雄 高 橋 英 司 片 山 勇

今田見信著「開国歯科医人伝」の緒論に、わが国に泰西歯科学が渡来した経路は、1. 支那を中継して漢医学によって東漸したもの、2. 外国人殊にポルトガル人。オランダ人たちによって、いわゆる南蛮医学あるいは和蘭医学の一科として東漸したもの、3. 渡来した外国人歯科医によって直接わが国に紹介されたもの、4. 外国にあつた日本人が歯科医術を修得、帰国してわが国に紹介したものの4つを考えると述べているが、このいわゆる南蛮医学あるいは和蘭医学における歯科学についての記載はみあたらない。

演者らが架蔵するオランダ医学に関する写本は26種、また刊本は山本玄仙撰、元和5年（1619）刊、万外集要（南蛮流）、山脇道門重顕著、寛文10年（1670）刊、外科良方（阿蘭陀流外科書）、浪華陰舎、沢野忠庵伝方、元禄9年（1696）刊、阿蘭陀外科指南、中村宗璵著、紅毛秘伝外科療治集などである。これらの資料にみられる歯科的事項は、次のごとくである。和蘭金創紀聞（写）の坤に、インリエントエケヒシャニムは歯牙疼痛に効あり、吉雄永純訳、和蘭雑方集（写）に重舌、兎唇、口中を療スル方、栗崎流外伝外科療簡全、吉尾（雄）流外科簡全、合本（写）に金創仕掛口伝秘訳に、口角から頬部外傷の縫合、吉雄流に重舌、兎口の療法及び口中含薬（口中痛ヲ治スル妙薬）、紅毛三書に缺唇療法之事、栗崎流永阪家秘方伝受に乳香散（歯打折痛二吉）、金創師語録（カスハル伝療治書）に顔面ノ疵、南蛮流外科金瘡秘伝に口中吹薬、紅毛外科真伝に骨槽風と兎唇の症治例、和蘭内療方に走馬下疳、牙齒、口舌、阿蘭

陀外科書に舌サケ痛時ノ治方，口中クサキ時治スル方，口中瘡ノ治方，阿蘭陀兎牟涅留流に走馬下疳，缺唇法，牙疳，一切腫物見分内外仕掛に口中藥方として寛口散，また刊本では万外集要の上巻に口中百病ノコト，中巻に口中之藥，阿蘭陀外科指南は南蛮流外科秘伝書として刊行されたものと同一内容なので，南蛮流外科も和蘭陀外科も区別がなく，これに漢方が含まれている．外科良方は内題は阿蘭陀流外科書で，巻三に舌サケ痛タダレタル時ノ藥，口中クサキ時ノ藥，虫喰牙ノ藥などがある．南蛮流とか和蘭流とはいえ在来の漢方を折衷した程度のもので，兎唇の手術以外にみるべきものがない．また，シーボルト所持の抜歯鉗子，挺子も果して，抜歯に実際に使用したか否かは不明であり，したがって南蛮医学や和蘭医学がわが国の歯科学の発展にはあまり影響を及ぼさなかったのではないかとと思われる．

しかし，万外集要に記されている外科可持道具之事をみると，針5本，焼金2本，鉸1本，鉄のヘラ2本，毛引鉸1本，角のヘラ1本，長刀針1本，鎌，口中切1本，小刀1本，サジ1本，合計11本から当時の外科手術の程度を知りうる．特に，鎌や焼金のあることは，口中百病之事に口中ノ腫物ハヤク破リ血ヲトリヤキカネヲアツルコト等一ナリから，当時の口中医にはある程度貢献したと考えられる．

南蛮流も和蘭（紅毛）流も外科の内容はほとんど差異がなく，また檣林，西，吉雄，桂川，村山，嵐山などの諸流も名称は違っているが内容はあまり違いがなく，主にアンブロアス・パレー（Ambroise Pare 1515～1590）の所説よりとり，それに在来の漢方を折衷した医方である．即ち，その治術は膏藥使用を主とするもので，創傷は焼酒で消毒し，その後鋏やメスで切り，針で創口を縫い，再び創面を焼酒で洗い，卵の白味（または黄味）に椰子油を加えたものに浸した木綿で覆い其上を木綿で巻く．即ち，包帯をするなどが兎唇の手術で，それに漢方の湯液が内服として併用された．

〔質 問〕 成 田 令 博

（東京医科大学口腔外科）

オランダ医学書に見られる外科手術に対する麻醉法について御教示願います．

〔解 答〕 谷 津 三 雄（日大松戸歯）

1. 阿片硬膏をつけ局所麻醉で嵐山，甫安が，わが国で最初の兎唇の手術を貞享4年（1687）に行っているが，これはオランダ医学（アルマンス医方）による．

2. テリアカという万病に効くという薬にも阿片が含まれていて歯痛に効くとの記載がある．

3. クレオソートは蘭人が伝えた止痛丸といわれ歯痛の止痛に使用したのが嘉永元年（1848）の方庵日記にある．

4. しかし，マンダラゲやヒヨスなども酒とともに内服していたとも考えられるが当時は秘方で公表されていない．

フロイトと口腔癌，そして顎切除の歴史的展望

東京医科大学口腔外科学教室 成 田 令 博

精神分析学の始祖ともいべきジクムント，フロイトについては，その心理学的な面での研究は極めて多岐に亘っているが，彼が晩年の67歳の時に口腔癌に罹患し，83歳の生涯を終えるまで実に大小33回の手術を受け，術後の苦痛に如何に耐えながら生きぬいたかということは，あまり知られていない．

近代医学の初期において，どのような口腔癌の治療がなされたか，また，この高名な精神分析学者が絶えず激しい苦痛と死に直面しながら，不治の病に対し，死に対し，どのような心理状態で生きたかを知ることは，口腔外科学，医学心理学を学ぶものにとっては，極めて興味深いところである．顎切除の歴史と併せて述べる．

フロイトの口腔癌に対する手術は，1923年ウィーン大学の口腔外科医ピヒラーによって右側上顎半側切除手術が行われている．術後はすぐ顎義歯が装着されているが，その後は間断ない激痛に悩